

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。 Copyrighted materials of the authors.

「アフリカ史叙述の方法にかんする研究」(2011年度第1回研究会)

日時：2011年6月11日(土) 14:00-18:00

場所：本郷サテライト7階会議室

報告者1：永原陽子(AA研所員)

報告タイトル：「研究会の進め方について」

報告者2：苅谷康太(AA研共同研究員、日本学術振興会特別研究員/東京大学東洋文化研究所)

報告タイトル：「〈アフリカ〉史叙述について」

1. 永原陽子「研究会の進め方について」

本共同研究の趣旨について、研究代表者から説明した。

本研究の背景として、まず、(とりわけ日本の)歴史学におけるアフリカ研究の立ち遅れ、世界史認識における「アフリカ」の欠如がある。このことは、様々な「世界史」企画の構成や、学術体制(いわゆる「日・東・西」の三分とそこからのアフリカの除外)にも見て取ることができる。アフリカを含む世界史認識を構築し、世界史的な視点から「アフリカ史」を叙述するための方法を検討することが、本研究の第一の目的である。

一方、アフリカ地域研究においては、歴史研究が甚だしく立ち遅れ、また軽視されているという事情がある。欧米語文献に依拠した研究がはらむ問題は言うまでもないが、それ以上に、いわゆる「無文字社会」論の影響が、史料研究の等閑視をもたらしている点を見過ごすことができない。それは、アフリカにおける歴史研究は人類学手法によるしかないとの誤解を生みだしてきた。アフリカ史研究のための文字史料の発見・利用の可能性、文字史料と非文字史料との関係、オーラルヒストリーによる歴史研究と人類学的研究との関係等について検討し、歴史学的手法によるアフリカ研究の可能性を追求することが本研究のもう一つの目的である。

具体的な検討課題としては、上述の史料にかんする問題の検討と並行して、地域区分(アフリカ大陸内の地域区分、とりわけサハラ以南と以北の二分法の再検討)、時代区分(プレコロニアル、コロニアル、ポストコロニアルの三分の相対化)、世界史におけるアフリカの位置づけ(「アフリカ」という単位の相対化、諸地域世界との関係)、ジェンダー視点からのこれら論点の見直し、などを挙げるができる。

以上の問題提起にかんし、各参加者が自身の専門について紹介しつつ、共同研究の進め方について意見を交換した。

2. 荻谷康太「〈アフリカ〉史叙述について」

本発表では、「アフリカ史叙述の方法にかんする研究」という共同研究の主題に沿い、〈アフリカ〉史を叙述するための一つの方法論を提起した。その内容は、大きく以下の3部からなる。

(1) 問題提起

〈アフリカ〉は、統一的な歴史叙述を可能とするような、もしくはそうした歴史叙述を採用するにふさわしい一体性もしくは外部との境界性を有しているのではあるだろうか。所与の〈アフリカ〉の「存在」を想定し、その中で悠久の過去から連綿と歴史が積み重ねられてきたという前提がなければ、恐らく「アフリカ史叙述」という言葉は成立しないのではないだろうか。しかし、「アフリカ」という言葉によって〈アフリカ〉を一つの塊として把握する営為は、歴史のある時点で外部の視点からなされたものであろう。換言すれば、それは、歴史上の特定の人々が認識した〈アフリカ〉である。アフリカ大陸上の各地域間に大きな政治的・経済的・社会的・文化的差異があることを知る今日の我々が、そうした差異の無化を促し得る〈アフリカ〉という認識を継承する必然性は果たしてあるのだろうか。あるいは、〈アフリカ〉という認識を受け入れた場合、それに対する歴史叙述は如何にして可能になるのであろうか。

(2) 事例研究

報告者は、博士論文等において西アフリカのイスラーム知識人達のアラビア語著作群に着目し、その分析から、サハラ以南アフリカ北西部、サハラ沙漠西部、北アフリカ、西アジアへと広がる、宗教知識人達の知的連関網を描写してきた。この事例から、西アフリカのムスリム社会の動態や歴史の精緻な理解が、これまで異なる地域として認識されがちであったサハラ以南アフリカ北西部とそれより北の地域との強固な繋がりが交流の把握なしにはなしえない点を指摘した。つまり、西アフリカのムスリム社会という対象により接近し、その様相を描き出すためには、従来の地域措定を相対化し、その描写に適した新たな地域的枠組みの中で対象に向き合う必要が出てくるのである。

(3) 〈アフリカ〉史叙述の方法

実際に歴史叙述をなす場合、それは、一定の時間的射程における特定の主題を巡るものとなるだろう。そうした特定の主題を設定した時、なされるべきは、一体性や外部との境界性を想起させる〈アフリカ〉を所与の「存在」として確立することなく、その主題を説得的に叙述するための新たな複数の地域の枠組みを模索することであろう。「アフリカ史叙述」というからには、それらの地域に、アフリカ大陸上の諸部分が含まれるべきであると考えられるが、同時に、アフリカ大陸以外の諸地域も含まれ得るのである。そして、〈アフリカ〉史を世界の歴史の中に位置づけるという共同研究の目的を考慮するならば、それら複数の地域の歴史叙述を、所与の認識としての〈アフリカ〉の歴史に回収させることなく、世界の歴史に直接組み込んでいくことが目指されるべきなのではないだろうか。

以上の内容に対し、「(2) 事例研究」で示した西アフリカのイスラーム以外にはどのような事例が考察の対象となるのか、西アフリカに比して、文字資料の乏しい地域では如何にして歴史叙述が可能になるのか、資料面での制約を補う他の学問領域との連携にはどのようなものが考えられるのか、などといった極めて具体的で建設的な意見交換が報告者を含む全参加者の間でなされ、そこから、「アフリカ史叙述の方法」という共同研究の主題にとって最も重要な論点の一つである〈アフリカ〉を如何に捉えるのか、という問題にまで議論が広がった。特にこの〈アフリカ〉をどのように論じるべきか、という点は、次回以降も議論され続けていく問題であると思われる。